



# PONV研究の過去・現在・未来

**座長** 川口 昌彦 先生  
奈良県立医科大学 麻酔科学教室 教授

**演者** 杉野 繁一 先生  
東北大学大学院 医学系研究科  
外科病態学講座麻酔科学・周術期医学分野 准教授

日時 ▶ 2024年4月13日 (土)  
14:20 ~ 15:20

会場 ▶ 第2会場  
江陽グランドホテル  
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2丁目3-1

- 本セミナーは整理券制ではございません。
- 現地開催のみ。

## PONV研究の過去・現在・未来

麻酔科医は術後悪心嘔吐(PONV)をどのように防ぐのか？という疑問は、いつの時代でも重要な問題であり、令和の日本でもそれは変わらない。PONVに関する研究は、これまで9,000編以上の論文があり、2020年にはPONVの診療指針が第4版にアップデートされ、そこでは430編が引用されている。PONV研究の歴史の中で、エポックメイキングな研究は、2004年のApfelらのNEJMの論文である。今からちょうど20年前のこの報告では、PONVの予防には、オンダンセトロン、デキサメサゾン、ドロペリドール、そしてプロポフォール麻酔が有用であることを、明確に世に提示している。この論文は被引用数が1,200回という物凄い論文である。PONVは「周術期の診療の質を高める」という麻酔科医のミッションに合致する、素敵な研究テーマなのだ。

一方、Apfelらの報告以前にどんな研究があったのか、意外と誰も知らない。古くは1891年にThomasらが、アポモルフィンに対する犬の嘔吐行動が延髄の破壊実験で消失することを示している。その延髄の最後野に嘔吐の化学受容器引金帯があることを示したのは1952年のWangの研究だ。1950年代までにはドパミン受容体拮抗薬やヒスタミン受容体拮抗薬の制吐効果が知られるようになったが、同時代の1,000例の麻酔死症例の分析では、驚くべきことに、110例(11%)が嘔吐・誤嚥による周術期の死亡であることは、非常に興味深い。

本講演では、PONV研究の黎明をいくつかの古典論文とともに紹介し、2020年の最新の診療指針を概説する。さらに本講演では東北大学麻酔科で進めているPONVの基礎研究のデータを供覧し、今後の展望を皆さんと共有したい。PONV研究の過去・現在・未来を俯瞰することで、明日からの麻酔診療がもっと面白くなる(かもしれない)。

え？悪心嘔吐の話なんて口の中が酸っぱくなる気がする？心配ありません。本講演は甘味とお茶を片手に気楽に傍聴ください。

Take fantastic sweets and happy time!